

M氏ノ運転シタ風景ノ記憶⑩

(どうして冷えたふぎのとうの天ぶらはこんなに苦いんだろう)

二日酔いで遅い朝食を食べていた。この頃、僕は予備校の講師をしていて国公立大学入試が終了すると少しだけ休みがある。その間を使って父の墓参りに帰省していた。

「線香とマッチと花、一緒にして紙袋に入れどぐね」母は墓参りの用意をしてきていた。

「歩いたら、二時間ぐらい掛かんだから：自転車で行きなあ」と真剣な顔で言ってきた。

「いやいいんだあ。今日はやる事は：こんだけだから」と言つて僕は用意を急いだ。

一昨日は三月なのに大雪だったらしい。しかし、帰つてきた昨日は快晴、そして今日もなかなかの良い天気である。

(あつたかいなあ。いや、あつたかいより生ぬるいやあ)と感じながら出発した。

一時間ぐらい歩くと泥だらけの道になった。(こりやあ、お墓に着く頃は靴なんかぐしやぐしやだなあ)朝より気温がぐつと上がつて、雪が解けて用水路の水の勢いがすさまじい。

周りの田んぼもプールのようである。やつとの思いでお墓に着くと、真っ白い吾妻小富士が正面にみえた。お墓の上に乗った水つぼい雪の塊を手で払い、やかんで水を掛けて清めた。

(来たよ)と話しながら古い花を新しい花に換え、線香に火をつける。そして五分ぐらい雪解けの匂いと供に合掌した。

(よし、帰るか)来た道を引き返そうとして歩き始めると、後から貨物列車が近づいてくる。

オレンジ色のディーゼル機関車が黒い貨車を引つ張っていて、一つ一つの貨車の屋根の上にはまだたくさん雪が乗っていた。